

# 慧思における禪定思想の展開

新 田 雅 章

慧思教学に特有な思想的特徴は、ごく一般的にいつてたと  
えば唐の高僧伝<sup>①</sup>が整理してみせたように、禪定主義に貫かれ  
たきわめて実践的な色彩を強く帯びた教説からなるという点  
にみいだすことができる。ところでこのように特徴づけられ

しこれら五部のうちとりわけ後の三部はそれぞれ教学上の基  
本的問題について明確な説明を与えているだけに、これらを  
手掛りに慧思教学の全体を見通すことは、あながち不可能な  
ことでもないわけである。

慧思の教説も、より内面に立ち入つて整理してみると、必  
ずしも同一視しえない教理的立場から構成されていることが  
明らかとなろう。実践的関心を基本に教理の体系化が企図さ  
れるという基本線は踏まえられながらも、思想の構造からし  
て異質な傾向からなる教説が説示され、しかもそれらの間に  
思索の発展の關係がみいだされる。以下、慧思の禪定思想に  
焦点をあわせ、その面での慧思の基本的立場を整理しつつ思  
索の展開の過程を追つてみよう。現存する慧思の著述はわづ  
かに『隨自意三昧』『諸法無諍三昧法門』『法華經安樂行義』  
『受菩薩戒儀』『立誓願文』の五部を数えるだけであつて、  
これら三部のみを手掛りに慧思教学の基本的立場なりその展  
開の過程なりの厳密な理解は不可能ともみられようが、しか

慧思教学をきわだてて特徴づけるいわゆる禪觀思想の中心  
問題の一つは、諸法の究極態つまり諸法の「実相」<sup>②</sup>の概念的  
な説明といつたいわば教相門に属する作業に加えて、実相は  
まさに仏道修行の行者にとつて実践的に把握されねばならな  
い究極的境地であるとの理解の上に立つて、その如実な把  
握の方法を明示するところにある。すなわちどのような方法  
ないし形式にしたがつて諸法の実相の把握が可能となるのか  
といういわば実践の方法の問題が、示されるべき重要な課題  
として考究されるわけである。こうした観点から、前記三部  
の著述にあらわれる慧思の主張を整理してみると、そこには  
大別して二種の実相把握の方法についての見解が披歴されて  
いる。一は『隨自意三昧』『諸法無諍三昧法門』にみられる

「漸悟・次第」説の立場であり、他の一つは『法華經安樂行義』に詮示される「頓悟・不次第」説の立場の以上二種の「さとり」の体得方法についての見解である。

まず『隨自意三昧』の説明についてみるとたとえばそのなかの「住威儀品」につきのような説明がみられる。

菩薩立時諦觀此身色之空法頭等六分如空中雲、氣息出入如空中風、身色虛空如空中華。云何得知息実相、先觀三性、後觀假名。何等三性、一者心性、二者色性、三者息性。……先觀前三性、若先觀心性、沈細難知。若先觀色性、龜朴難解、応先觀息（記続、二・三・四、三四六右）

実相ば息↓心↓身↓の順序、次第を経て觀察されるなかで觀破されるというのである。こうした実践觀はまさに漸悟・次第の方法を基礎に構想されたものにほかならない。

これと基本的に全く同様の実践觀が『諸法無諍三昧法門』にも詮示されている。必要な箇所を整理してあげてみよう。

(一) 先觀息入出生滅不可得、次觀心相……先觀入息從何方來、都無所從、……復觀出息從何処生、審諦觀察、都無生処。……復觀中間相貌何似。如是觀時、如空微風、都無相貌。

(二) 即觀此心住在何処、復觀身内、都不息心、復觀身外、亦無心相、復觀中間、無有相貌。

(三) 我今此身從何生、如是觀時、都無生処。

「無斷無常、無生無滅、無相無貌、無名無字、即無生死、

亦無涅槃」として詮表される「諸法の実相」を徹見するための具体的方法は、まず息の出・入および中間の相貌の觀察にはじまり、ついで心の所在の究明、最後に身の源由の究尽という順序からなる方法でなければならぬのである。ここに提示された実相把握の方法も息↓心↓身の觀察順序にしたがつて展開される形式であるという点で、これまた漸次・次第の方法といつてよい。

もつとも、『隨自意三昧』『諸法無諍三昧法門』に説示された実相把握の方法を対照してみると、両者が必ずしも全同でないことが明らかとなる。前者では「入息」を先とし、「出息」「中間」の順で觀察されねばならないとみられているのに対し、後者では「入息」「出息」の順序が逆となり「出息」から觀察が始められるべきものと解されている。しかしこうした相違は行法の本質的な違いを意味するものではない。ともあれ息↓心↓身の順序で觀察されるという方法は、両者の実相把握の基本をなしている。しかも身の觀察を完了したあと、あらためて息・身の觀察を実修することが、両者においてともに要請されている。また、息↓心↓色の順序にしたがつて実相の推究が展開されねばならない理由についても、両者は同じ理由をあげている。色（性）は「龜朴」（「龜利」）であり、心（性）は「沈重」（「沈細」）であつてともに「理解し難」き「対境」であるがゆえに、「解し易」い「息」から觀

察を始めるのが、もつとも適当な方法であるというのである。<sup>⑧</sup>このようにみてくると、両者の説く実相把握のための方法は、基本的に同じ形式からなる方法と見做してよい。諸法の「一切空寂」なるありかたに「実相」の観得は、息↓心↓身の順序で観察されるいわゆる「次第」の観法の遂行過程のなかで実現されてゆくわけである。

こうした実相把握の方法は、その形式の性格、傾向からして十分定かではないが『坐禅三昧経』『禪秘要法経』の表詮する実践方法にならつて構想された形式と考えられるが、慧思の場合、こうしたいわゆる「次第行」のみが実践の基本形式すなわち禅法の修習の基本的な方法と見做されているわけではない。もう一つの著述『法華経安樂行義』には漸悟の形式とは異なるいわゆる「頓悟」の形式が紹介され、しかもその実践の有効性と正当性が強調されている。

法華経者大乘頓覺、無師自悟疾成仏道、一切世間難信法門。凡是一切新学菩薩、欲求大乘超過一切諸菩薩疾成仏道、須持戒忍辱精進勤修禪定、専心勤学法華三昧(『法華経安樂行義』四六・六九 七下)

いち疾い仏道完成の途を教える法華経の「さとり」の途は、一面「難信の法門」であつても「疾成仏道」を希求する新学の菩薩は、この「頓覺」の法門としての「法華三昧」を勤修しなければならぬとの見解が披歴され、新たに「頓覺」の

途が示唆される。ここには頓覺の立場をより有効と理解する見方が表詮されているが、慧思におけるこうした頓覺の立場を正当な実践的立場と了解する承認の仕方はまた、「次第行」を実践する菩薩を「利根菩薩」、一地より一地へと段階的に修行の完成を目指す菩薩を「鈍根菩薩」といつた形で菩薩を価値的に類別して理解する理解の仕方からもはつきりと窺える。

ところで大乘菩薩の途として重視される頓覺・不次第の途とは、その実践の具体的修習の方法の点からして、いかなる形式にしたがつて遂行されるのであろうか。『法華経安樂行義』の説明から推察するに、それは、「有相安樂行」「無相安樂行」の二種の安樂行のうち「無相行」の行規に相当すると考えて間違いないであらう。<sup>⑨</sup>さて無相行とは

無相行者、即是安樂行、一切諸法中、心相寂滅、畢竟不生、故名爲無相行也(『法華経安樂行義』四六・七〇〇上)

といわれているように、「心」にかかわりその寂滅、不生を觀破するのが、無相行の基本なのである。したがつて頓覺の行としての「安樂行」の実践のいわば方法的基調は、心の本来の形態―寂滅無相の徹見にあるといつてよからう。頓覺の行のこうした実践の方法は、法華の菩薩が「一心一学」を基本に成立するといわれるところからも明らかにされるところである。頓覺の行とはまさに心の推究を実践の基本として成

りたつ行をいうのである。しかも『法華經安樂行義』においては息・身を觀察する方法が全く顧慮されていない点も十分注意されるべきであろう。ただ心の觀察という方法のみが顧慮されているにすぎない。こうしてみると、『法華經安樂行義』所説の頓覚の行とは、心の觀察が唯一にして、しかも行法のすべてであるとの見解を基礎に構想された行であることが明らかとなる。

さて、『法華經安樂行義』に証示される、心の觀察を骨子として成立するこうした頓覚の行は、『隨自意三昧』『諸法無諍三昧法門』所説のさきにした漸悟<sup>二</sup>次第の行と比べた場合、思想の構造的性格からして、全く異質な実践觀に貫かれた行法であるといつてよい。したがつて慧思にあつては異なる二種の実践の形式が構想されていることになる。ところで、こうした二種の異なるつた実践形式の紹介は、慧思の場合、彼の実踐觀の推移、変容をあらわしているものと解することができる。こうした推測の信憑性は『諸法無諍三昧法門』の記述態度から証示されよう。すなわち、『諸法無諍三昧法門』所説の実踐形式の基本は、さきにもたように漸悟・次第にみいだすことができた。そこでは息↓心↓身の次第を経て展開する觀察のなかで一切の空寂な様態の觀破が成就されるものと解されていたのである。こうした点からみれば、『諸法無諍三昧法門』所説の実踐觀は、これまた同じように漸

悟・次第の実踐觀を標榜する『隨自意三昧』のそれと変わるどころがないといつてよい。しかし両者はともに漸悟の行が実践の基本であると理解しながらも、実践の有効性の面で、上記三種の觀法相互の間に差異を認めるか否かの問題をめぐつて、微妙に異なるつた主張を提起する。すなわち『隨自意三昧』ではこれら三種の觀法は実践の方法、形式を異にするとはいへ、異なるつた実践的境地を開示する觀法であるとはみられていない。これに対し『諸法無諍三昧法門』では上記三種の觀法は、たんに方法上の違いだけではなく、実践の有効性の面でも相互に優劣をもつものと解され、そのなかでもとりわけ心の觀察の方法がもつとも重視される。こうした事情はつぎの説明から端的に窺いうるであろう。

觀心念処本。是故心念処為主。

そしてこれに続いてさらに一連の偈を説いてこうした提言を詳しく縷説する。必要な箇所を紹介すれば

初坐禅時觀不淨、觀出入息生滅相。不淨觀及出入息、是心心数非  
心性、觀心心数断煩惱、心性即是煩惱性、心数心性平等觀、具足  
禅慧成大聖。……身念受念及法念、覺了三念由觀心。……從無明  
緣至老死、皆是心相之所造、此仮名身及諸受、善不善法及無記、  
皆由妄念心所作、觀妄念心無生処（『諸法無諍三昧法門』下、四  
六・六三七中―下）

息・身の觀察の有意性と、息のあと心の觀察にとりかかる

と定める觀察の順序との両つを承認する一方で、心が「無明より老死に至るすべてのものの根源をなすとの理解を基礎に、心の觀察により重要性を認めようとする理解が、ここに示されている。心の觀察において一切法の実相がもつともきりつめられて觀破され、その寂滅無相のありかたが徹見されるというわけである。

このようにみてくると『隨自意三昧』と『諸法無諍三昧法門』における実相把握のための実践についての見解は、きわめて類似しているが微妙なところで違つているといつてよい。ところでこうした相違は両者の実践觀の質的相違をたんに表明するにとどまるものではない。『諸法無諍三昧法門』の主張が『法華經安樂行義』の実踐觀に構造上類似した内容を有しているところからして、『諸法無諍三昧法門』は『隨自意三昧』と『法華經安樂行義』との中間に作製されたのではないかと推測される。頓覺・不次第の実踐的立場が大乗の実踐の基本であるとの見解を闡明する『法華經安樂行義』における説明が暗示するごとく、禪觀思想をめぐる慧思の思索は、次第から不次第の重視の過程を辿つて展開されたのである。不次第の立場への傾斜は心の觀察の重視の方向への展開であつて、それはまさに主觀的な実践觀の確立の方向であつたわけである。純粹に内省を中心とする実践方法が構想されるなかで『隨自意三昧』↓『諸法無諍三昧法

門』↓『法華經安樂行義』の順序にしたがつてそれぞれの作品の完成をみるにいたつたのであろう。

ところで慧思の思索のこうした展開の経緯ないし著述のこのような製作順序は、慧思と師弟の關係にある智顛の思索の展開の経緯からも推測することができる。智顛の思索の展開は、こと実践觀を軸にみた場合、息・色・心の觀察を基調に成立する漸次・次第の実踐構想が心の觀察を前面に押立て、その主體的把握に最大の関心を払う実践構想へと変容をとげてゆく過程であつた。初期の智顛の思索をもつともはつきりと伝える『次第禪門』所説の実踐構想は、觀法が息↓色↓心の順序で遂行されねばならないとの見解を基礎に構成されているが、そこに示された、堅固な菩提心の発起と方便の遵守、それらを基礎に各種の禪法を修しつゝ息・色・心の觀察を進めてゆくことを求める実践の構想は、その構成からして、『諸法無諍三昧法門』の構想をモデルに作製された形跡が濃厚である。もつとも、両者の間には觀法の順序の点で、慧思にあつては息↓心↓身、智顛にあつては息↓色↓心の順序で觀察されるべきであると解され、必ずしも完全な一致がみられないが、こうした相違は、両者の実践觀の本質的違いを意味するものではなく、むしろ、心の觀察を最優先させながら、心の觀察を一連の觀察過程の総仕上げの位置に組入れようとする慧思の『諸法無諍三昧法門』の構想の不自

然さの是正から生じた違いであるとみることができると。このように思索の出発点において慧思の「次第」観をモデルに進められた智顛の実践構想の体系化も、その後心の観察を方法的基調として成りたつ実践構想の体系化が試みられるようになる。著述でいえば『法華三昧懺儀』『覺意三昧』『小止観』等にそうした方向への思索の展開の跡がはつきりと示されている。それらの著述では「諸法は皆心に従つて起<sup>(4)</sup>」<sup>(5)</sup> こととの見解に立つて心の観察が実践の基本であるとの立場が構想されてくるわけである。ところで智顛のこうした心の観察を實踐の基本的な方法と理解する仕方は、慧思の『法華經安樂行義』にみられる理解の仕方と同じであるといつてよいのではあるまいか。次第の方法が、智顛にあつて、『諸法無諍三昧法門』の主張の影響のもとに構想されたと同じように、心の観察を基本とする不次第の方法も、智顛の場合、『法華經安樂行義』における慧思の不次第の重視すなわち心の観察という方法の有効性の強調からの影響をうけて思索されるにいたつたとみられなくもないのである。心の観察を重視する慧思の立場は、智顛の思索の展開に何らかの意味で影を落していることは想像に難くない。もしそうだとすれば、智顛の思索の展開の過程は慧思の思索の展開の過程を間接的に反映していることになる。智顛の思索の展開の過程を介してわれわれは、慧思の思索が次第から不次第・頓覺を重視する立場へと

展開していつた経緯を窺うことができよう。

- 1 周知のように唐高僧伝中慧思は習禪篇に紹介されている。
- 2 『大乘止観法門』も慧思の作と記されているが、これは従来から疑問視されてきたものである。筆者も内容からみて慧思の作とみることに賛成しかねる。
- 3 慧思も実相という表現を用いている。『法統』二・三・四、三四六右上下および下。その他『諸法無諍三昧法門』ではたとえば「亦知諸法無生滅真実相、無名無字、無漏無為、無相為貌」（四六・六三一上）といった説明がみえている。この用例から明らかかなように、実相は諸法の真実の様相の意に用いられ、用法の上で智顛のそれと異なることはない。
- 4 『諸法無諍三昧法門』下、四六・三三三上。
- 5 実相の表現としてこうした用例もある（『諸法無諍三昧法門』下、四六・六三三上—中）。
- 6 『隨自意三昧』の当該箇所を示せば『法統』二・三・四、三四六右下。
- 7 『隨自意三昧』『法統』二・三・四、三四七左上、『諸法無諍三昧法門』下、四六・六三三上—中。
- 8 当該箇所は『隨自意三昧』『法統』二・三・四、三四六右上下。『諸法無諍三昧法門』下、四六・六三三上。
- 9 『坐禪三昧經』には、入息出息の観察（十五・二七三上）、内身外身内外身の観察（十五・二七八下）それに「云何心」といつたように心の観察（十五・二七九上）が重要な行法であることが示されている。『禪秘要法經』の所説はあまりにも煩瑣であつて慧思教学との関係を具体的に証明しえないが、そこに

は色身・息の観察が説かれている。内容からして少くとも慧思  
教学のベースとなつたであろう。とりわけ「下巻」参照。

10 『法華經安樂行義』四六・六九八下。「法華菩薩即不如此、  
……不從一地至一地者、是利根菩薩、……」等の説明参照。

11 「無相行者、……常在一切深妙禪定、行住坐臥飲食語言、一  
切威儀心常定故」(『法華經安樂行義』四六・七〇〇上)といつ  
た説明から明らかであろう。

12 『法華經安樂行義』四六・六九八下。

13 『諸法無諍三昧法門』下、四六・六三七中。

14 智顛のいう色は、狭くは自己の身体からはじまり、山林樹木  
等の諸存在、さらには一家一聚落および一国土等、十方世界の  
一切の存在するものを指示し、慧思の身の意味より概念的には  
るかに広い。『次第禪門』三上、四六・四九五中参照。慧思の  
身の意味は文字通り自己の身体に限定されている。

15 拙稿「智顛における禪から止観への展開の意味」(『宗教研  
究』二〇四号所収)参照。

16 拙稿「『次第禪門』を中心としてみた智顛の「法」認識をめ  
ぐる問題」(『東方学』三五輯所収)参照。

17 『法華三昧懺儀』四六・九五四中。なお『覺意三昧』では「夫  
行人欲度生死大海、登涅槃彼岸者、必了達妄惑之本、……所謂  
反照心源」(四六・六二二上)、『小止観』では「若行者、如是  
修止観時、即能了知一切諸法皆由心生、因縁虚仮、不実故空」  
(定本小止観・関口真大著『天台止観の研究』三六〇)等とあ  
り、心の観察という方法が実践の基本に位置づけられている。

## 執筆者紹介(五)

- |      |                  |
|------|------------------|
| 栗須礼夫 | (大谷大学大学院)        |
| 久保田周 | (大阪基督教短期大学講師)    |
| 吉元信行 | (日本学術振興会奨励研究員)   |
| 伊藤浄厳 | (高野山大学助手)        |
| 向井亮  | (北海道大学大学院)       |
| 高橋壮  | (東京大学大学院)        |
| 森章司  | (東洋大学助手)         |
| 八力広喜 | (北海道武蔵女子短期大学助教授) |
| 中祖一誠 | (愛知学院大学講師)       |
| 藤村隆淳 | (高野山大学助手)        |
| 皆川広義 | (駒沢大学講師)         |
| 前田崇  | (東北大学大学院)        |
| 宮本正尊 | (駒沢大学教授)         |
| 田村芳朗 | (東京大学教授)         |
| 片山一良 | (大藏経刊行会嘱託)       |
| 武田耕道 | (京都大学大学院)        |
| 頼富本宏 | (京都大学大学院)        |
| 土橋恭秀 | (京都大学大学院)        |
| 田中敏雄 | (東京外国語大学助教授)     |
| 谷田貞志 | (早稲田大学大学院)       |
- (一二七頁につづく)